

訪 問 教 育 研 究

〈第 2 集〉

第 2 回全訪研大会研究発表
1989. 7. 28

全国訪問教育研究会

訪問教育における行事について

京都府立与謝の海養護学校

新 庄 久美子

こんにちは、「明るさと元気の宅急便」のキャッチフレーズで、昨年、全訪研に参加しましたが、逆にみんなから元気をいただいて帰りました。昨年はふたき旅館でひざをつき合わせていた会が、昨日にしても今日にしても、こんなにたくさんの人達が参加されていて、どきまぎしています。それに、昨日いっぱい勉強した後、全国のすばらしい先生たちと夜を徹して話をし、頭がいっぱいでうまくはなせないかもしれません。また、私の報告は、私自身の実践というよりも、与謝の海養護学校全体で創り上げてきた実践なので、孤軍奮闘されているみなさんのような迫力とか意気込みとかに欠けるかもしれませんが、子どもたちや全校の先生の代表として報告していきたいと思います。

与謝の海養護学校の中での訪問教育の位置づけ

与謝の海は、天の橋立が一望できる高台にあり、海あり山ありと、恵まれた自然といつもふれあっています。10数年にわたる、地域の人たち、お母さんたち、教師、行政の人たちのねばり強い力で、この養護学校ができました。今年で21年目です。

学校設立の基本的理念＝実践的課題は

1. すべての子どもにひとしく教育を保障する学校をつくろう
2. 学校に子どもを合わせるのではなく、子どもに合った学校をつくろう
3. 学校づくりは箱づくりではない、民主的な地域づくりである

国でいえば憲法にあたるこの基本理念を実践課題として大事にして歩んでいます。ですから、開校当初より重度の子どもたちを大切にしていこうとしてきました。本校の訪問教育が出発した時をみると、特徴的な点が二つほどあげられます。

1. 本校の訪問教育の特徴

一つは、訪問教育という学校に来られない子どもたちの問題を、全校で考えていこうとしたことです。——かつては、訪問教育部という形をとっていましたが、実際に訪問に携わっている者だけでなく、養護教諭、栄養士、機能訓練担当、各学部より一名ずつで構成し、訪問教育生の問題を考えてきました。訪問教育を受けている子どもたちを、どういうふうに育てていくのかを、集団的に考えていける基盤があったわけです。

特徴の二つめは、訪問教育を固定的にとらえず、全日教育への過度的措置とおさえたことです。障害の重い子どもたちの実践が学校の中でもすすむ中で、訪問に携わる先生たちが、「本当に、毎日教育ができたらなア」「もっと、たくさん、教材や、設備があったらなア」という思いをつのらせ、ねばり強く、全日教育に移行させ

ていくとりくみをしてられました。しかし、それは、単に子どもたちを学校に来させることを唯一の目標としたわけではなく、全日教育にこめられている『毎日教育を受けることのすばらしさ』『子どもたち、教師の集団のあることのすばらしさ』を、訪問教育の中でも、追求していく目を大事にし、とりくんできたのではと思います。

2. 『たんぽぽ学級』

そういう考えに基づいて、実践を積みあげていく中で、1982年、ねたままの子どもたちを新一年生に迎える。その年に、かつては訪問教育の対象であった様な、障害の大変重い生徒も安心して学校に来れる学級をつくろうということで、『たんぽぽ学級』を設置してきました。その設置にあたっては、訪問教育生もスクーリングの際、疲れが出ないように、ねたままの姿勢を大切にして『たたみのある教室』がほしいという様に、積極的に中身づくりに関わってきました。内容としても、刺激に対する配慮やゆったりとした流れの日課を考え、設備面では、先にもいったように、たたみの間（床から高く）を多くとった教室の設置や、湯沸器・暗幕・暖房の設備、更にはねたまま登校できるようにと、スクールバスをリクライニングにしろなど、決して充分とはいえませんが、その当時としてはありったけのことをとりくみました。そして、何よりもそれらが、全教職員の重なる討議と協力で実現したことが、担当する担任団の大きな実践の支えになったことも、つけ加えておきます。

1984年、たんぽぽ学級が発展していく中で、高学年で、重度重複学級より、更に細かい配慮のいる生徒にも、そうした学級が必要ではないかということで、中・高等部を中心とした学級として、『ひまわり学級』をつくり、この二つをあわせて「重心」教育部※を設置しました。

※ 本来、「重心」という用語は、厚生省用語ですが、障害が重いけれども、決して、心が重心というわけではないので、適切な用語が、望まれます。

それで、現在は「 」つきで、示しています。

3. より、学校と、結びついて

この「重心」教育部ができる中で、訪問の子どもたちも、学校に来れば、同じ課題をもつ仲間のこの学級に安心して、入っていくことができました。さきほど言いました全日教育の過度的措置は、毎日学校に来れるための発展的な考えとして学級が設置され、一方では、訪問にいても、一人ではなく複数でという考え方で複数担任であたれるようにしています。これも全校で子どもを大切に、必要な人数をあてていこうという、長い時間全校討論を重ねてきた結果であると思います。

現在、そうやって部が設置されても大事にしていることは、全校の先生に訪問教育の子どものことを必ず知らせていくことです。学校に来ていない子どもたちだからこそ、資料にもつけましたが、毎週一回訪問ニュースを発行して、全校の先生に配ったり、あるいは朝のうちあわせで子どもたちの喜びあえることや、ちょっと困ったことだとかを報告し、全体のものにする努力をしています。

今年度は、訪問教育生は小学1年生1人、小学3年生1人、中学3年生1人の計3名です。どんなことをやっているのかを口で伝えるのは難しいので、昨年度「重心」担任団でつくりました「学校大好き」というビデオをみてもらって、紹介にかえさせてもらいたいと思います。



雪の中の与謝の海 —— 元気に、スクールバスに乗ってやってくる子どもたち。大好きな、学校のスタートです。



寄宿舎生のあかねちゃん —— 訪問教育生よりも、障害の重い生徒。訪問から、全日制へ。朝食たべて、スタートです。



そして、訪問教育の一コマ。楽しかった修学旅行。だけど訪問教育は週2回4時間、「ぼくらは、もっと勉強したい!」

「重心」学級の一日の様子や、訪問教育の様子を編集しました。教育のもつ意味をあらためて、子どもたちから教わりました。

ありのままだが伝えられなくて残念です。

訪問教育における行事

前おきが長くなりましたが、行事について話していきたいと思います。「重心」学級ができてからも、いえそれ以前からも、訪問教育生は、学校行事に関わってきたわけですが、そのつどとりくみの意義や、参加の仕方など、討議していきました。大まかではありますが、修学旅行と七夕音楽祭についてお話しします。

1. 大きな大きな夢をのせた

小さな小さな修学旅行

(1988年度)

(1) とりくみの経過

「訪問教育の生徒だから、本物にふれる機会、生の体験をさせてやりたい。」—これが担任と親の共通の思いでした。これまでの訪問教育の中で、積極的なからだづくりをし、全日教育にむけて、スクーリングや、一泊学習会、校外学習、集団学習の実践をつくってきました。これまでの訪問生の中には、家から一歩もでたことのない生徒もいましたが、今回修学旅行の対象となる生徒二名は、家族と泊りがけの旅を経験していました。そこで、ススム君は、中学部の修学旅行（五月、東京）に同行する予定でしたが、風邪をこじらせ、肺炎のため入院してしまい、行けなくなりました。しかし、当初の思いは変わらず、又、本人の体調も回復してきたために、集団学習をしている中二年生の訪問生、シンジ君も一緒に訪問独自の修学旅行を計画しました。「ねたままの子にあった旅行を！」訪問担当「重心」学級を中心に案をねり、学校全体の援助でとりくみをすすめました。そして、二泊三日の京都～神戸の旅を無事に終えたのです。

この時のビデオをお母さん、子どもと共にみた時、ススム君は手足をばたつかせ大よろこび。「先生！こんなに行く前、行った時、そして帰ってからと、よろこぶ旅行はほんまになかったで。一生の宝物や—」とお母さんの声。今もその感動を残していまいます。

この旅行の具体的なねらい、様子をみてみましょう。

① ねらい

家庭から離れることにより、いつもとは違った生活環境、自然環境の中で新しい経験をさせ、学習の広がりをめざす。

- 生活環境が変わっても、しっかり、睡眠・排泄をするなど、生活リズムを崩さない力をつける。
- 様々な交通機関・遊具を利用することで、身体ごとで、快さをつかんだり、移動の変化をつかむ。
- すぐれた文化にふれる中で、笑顔をはじめ、豊かな表情をひき出す。

② とりくみの留意点

- 移動も含め、ゆったりとした日課でとりくむ。
- みる・きく・ふれる（日常の学習）—— とりくみを中心とした内容を考える。
- 体調を細かく見ながら、とりくめるよう柔軟に対応する。

③ 参加対象と体制

- 訪問教育生 中学部2年 K. シンジ
 中学部3年 Y. ススム
- 引 率 者 訪問担当2名 校長
 「重心」学級より2名（元担任、保健免許所有1名）計5名
- 生徒実態

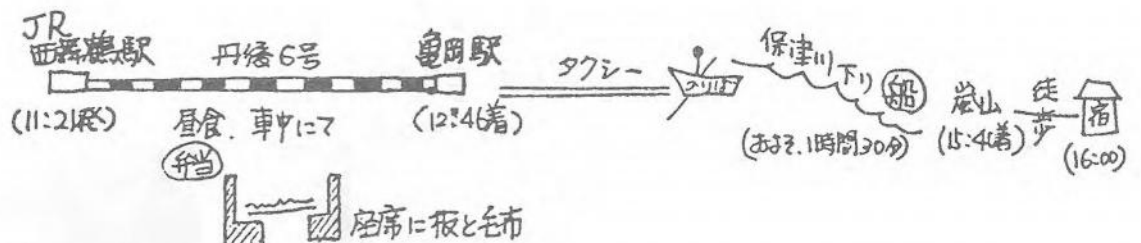
生徒実態

	障害	からだ	認識	健康・医療	その他
Y・ススム (中三)	脳性小児マヒ (アテトーゼ)	・非対称性姿勢 ・未定額 ・適度なよろこび、期待で、筋緊張を起す他、周期的にも緊張が高まる時がある。	・「イエス」の時ニコリ、「ノー」の時舌を出して、意志表示ができる。 ・天気、名前がわかる。 ・大小比較がほぼわかる。	・端鳴が常時ある。 ・そのための発熱が時々ある ・自然便 (毎日及び隔日)	身長 158cm (約) 体重 28kg 移動 リクライニング車イス
K・シンジ (中二)	脳性小児マヒ (アテトーゼ)	・非対称性姿勢 ・身体が弓状になっており、適度なよろこび、拒否で後弓反射をひきおこす。 ・右を向いているが、左からの働きかけに、顔を向ける。	・母親、知っている人の声をききわける。 ・好きな歌に笑顔がでる。 ・好きなり物から降りると「もっとのりたい」と泣く ・明暗を感じとる。	・つばののみこみが下手で時折むせる・ ・時折、コーヒー様おう吐がみられる (食道壁からの出血) ・喘鳴一時折 ・かん腸一毎日	身長 140cm (約) 体重 25kg 移動 バギー

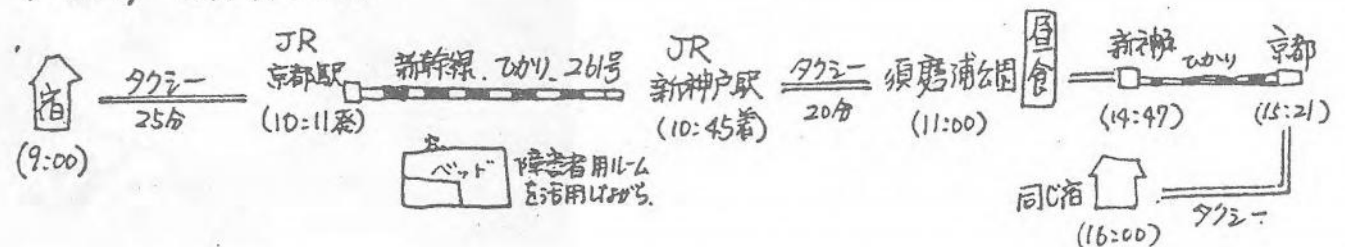
日程

<1日め> 10月18日(火)

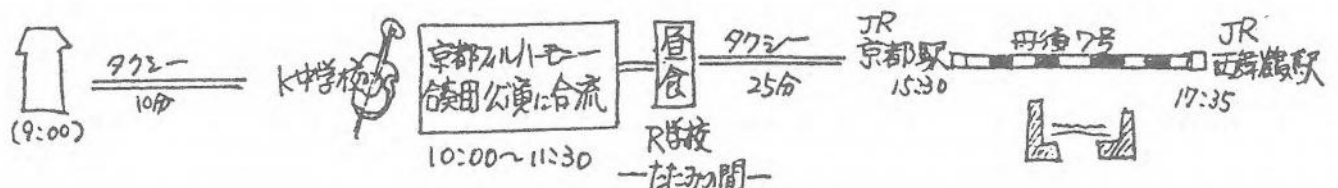
各自集合



<2日め> 10月19日(水)



<3日め> 10月20日(木)



(2) 旅行の様子から

訪問教育のたびに「〇〇へ行くよ」「ワァ、新幹線にのるよ」と、事前学習。それで、ススム君と、シンジ君は、「修学旅行」の『シュウ』と聞いただけで、大喜びする程楽しみにしており、散歩にせつせと出て、体力づくりにも励みました。ところが、前日出発という17日、ススム君は、睡眠不足と期待しすぎの微熱で、「行けるかしら」と大いに心配（急抛当日、朝受診、OKをもらう）ですから18日の朝、舞鶴駅に全員集合できた時は、もううれしくて、うれしくて！ニコニコ顔で丹後6号にのりこみました。



『保津川下り』からだごとでつかんだ舟の感動

しばらくはなだらかな流れ、ギーギーと、規則正しいのきしむ音。『なんだろうな』と、いったシンジ君の表情。まず、初めの急流、ザーッ。「流れの音が一段と高くなったな」と思っていると、ガタガタッと小刻みに左右にゆれ、パッチャーンと舟が下がっていきました。ハッとした二人の顔。そして又、ゆったりと舟は進んでいく。

そんな事が何回か続くと、音の変化で、『くるぞ!』と期待する二人でした。船のゆれや、川底からくる水の音や水しぶきなど、身体いっぱい、このおもしろさを感じとっていました。

やっぱりちがう生の演奏・うた声

ほら、見て下さい、この笑顔。これは、三日目のメインイベント、京都フィルハーモニー室内管弦楽団の演奏をきいているススム君の笑顔です。

生の音楽や文化に、ぜひふれさせてやりたいということで、各方面に問いあわせ、K中学校での演奏会に、合流させてもらうことになったこのとりくみ。はじめて聞く、バイオリンのせつない音色にススム君は、まゆを寄せたり、白いドレスの歌手がでると、目をパチクリさせたり、そして、あのクラシックの独特のせりあがりでは、キャーと、私の手をふ



りほどくほどのよろこびのポーズをしてました。シンジ君も、あのトランペットの音にびっくりして、緊張を増すかと思えば、うっとり聞き入って、大よろこびするなど、普段にはみられない姿をみせました。あらためて、本物は子どもたちの心をゆり動かすことを思うひとこまでした。

『ぼく、保津川のぼり』 — 帰り道で —

たくさんの感動とせたく物と、おみやげをもって駅へ。タクシーの中で、「なアススム君、京都駅から、何でかえる？」とききました。「JR?」『ペー』（ノーのサインは舌を出して示す)「タクシー?」『ペー』「電車?」『ペー』「ひこうき?」『ペー』—— 大好きなのりものでもない……ひょっとすると……

「舟か?」『ニコッ』（イエスのサイン)

ナント、ススム君は、舟で来たことを覚えていたのです。「そりゃあ、保津川下りじゃなくて、保津川のぼりやなあー。」「アッハハハッ」

タクシーの運転手さんも大笑い。楽しい経験が、二人の身体にしみこんでいくようでした。

(3) 修学旅行を終えて

不十分な点も残しながらもこの旅行は、私達にいっぱい教訓を残してくれたと思います。

その1つは、ねたままで移動できる工夫など、子どもの身体に留意し、実態にみあったものにしていく努力です。

2つには、生のオーケストラの演奏や、舟、新幹線など、ダイナミックなとりくみを考えると共に、「1日に山場を1つにする」など、疲れないう配慮を重ねてきたことです。

3つには、この修学旅行を通して、多くの人に、障害の重い子やこの訪問教育のことを知ってもらう機会としてきたことです。その点では、JRや、旅館とか、行く先々に写真入りの紹介やお願いの文章を送ったりしてきました。又、先に述べたK中学校には養護学校ができてきた過程とか、子どもたちが訪問教育で何を学び、どんなに学ぶことを喜んでいるかなど、詳しく書いて出したところ、それを全校の生徒の教材にして論議してもらおうということになりました。同世代の仲間と、すばらしい文化にふれるという、すばらしい経験となりました。

そして、この旅行で何よりもうれしかったのは、その後大きな病気や、体調を崩すということなく、すごせたことです。先に述べた様に、この旅行を支えたものは、スクーリングに来て安心できる学級ができたことや、一泊学習等の泊を伴う経験の積みあげ、訪問先でお母さん以外の人と食べれるよう食事指導をしてきたこと、訪問先でも集団を保障してきたことなどがあると思います。このように、ねたままの子どもに対する、大胆とも思われるとりくみと、「重心」学級で深めてきた内容や配慮が、今回の修学旅行をつくりあげる一定の見通しにつながったと思います。

シンジ君、八年間。ススム君、九年間。訪問教育の中で、からだづくりを中心にしたとりくみ、右余曲折はありながらも、たくましくなってきたことは何よりこの修学旅行を成功させた根本だったと思います。

たった2人の小さな小さな修学旅行でしたが、お母さんや、子どもたち、私達の夢を、大きく、大きくふくらませた、修学旅行でした。

更に詳しい内容は「よさのうみ」研究紀要37号に載っております。

又、全行程を撮ったビデオもあります。よろしかったら活用して下さい。

2. すべての子どもに星空のスポットを！

(1989年度)

—— 七夕音楽祭のとりくみより ——

体育館中に広がる、あふれんばかりの飾り。ふりそそいでくる天の川 — 訪問の子どもたちにも、見せてやりたい。澄んだフルートの音、スパンコールの光…どんな表情をするのだろう — 。今年も、七夕音楽祭がやってきました。訪問教育を受けている生徒3名のうち、今年は2名が、七夕音楽祭（学校行事）に参加できました。前日、いや、当日の朝まで体調と相談しなければいけない子どもたちで、参加できたことは、親も、子も、担任もうれしい限りです。その日の朝のうちあわせ…「今日、めぐみさんとあつし君が来れることになりました。みなさん、あたたかくむかえて下さい…」と、はじめて訪問担当になった先生も、ちょっと興奮気味でうれしい全校への報告となりました。

(1) 行事の2つの側面を大切にしていこう。

訪問生のスクーリングは、どうしても、学校の行事中心になります。本来、学校に行くだけでも疲れる子どもたちですから、学校にきて、リラックスできる状況をつくり出すことが大切だと思います。とりわけ、体育祭・文化祭などは、毎日登校している子どもたちにとっても、大きなイベントであり、とても疲れます。毎日登校している元気な子どもたちは、そうした興奮がプラスに働き、行事を節に自分に自信をもって成長していく姿をしばしばみてきました。しかし、乳児期前半の課題をもつ、大変障害の重い子どもたちにとっては、その刺激が受けとめられず、行事を境に、夜ねむれなかったり、体調を崩す…というふうに、マイナスに働いたことも見逃せません。

一方、行事は日ごろ、子どもたちが小さな変化ではあるけれど、教育という営みの中でみせている力（それは笑顔であったり、手のわずかな動きであったり）と、がんばっている姿、そこに生きている存在、そのものを、みんなに伝えたい — と、親も私達も、切に思っているところです。

そこで私達は、子どもたちへの配慮を充分に考えながらも、日頃の学習をできるだけ発表していくというように考え、とりくんできました。具体的には、訪問生のとりくみとして、以下の点を大切にしてきました。

- ① 当日、参加だけを考えず、できるだけこの日にむけて、スクーリングを重ね、普段の力が発揮できるようにしよう。
- ② 当日の内容についても、訪問教育生1人1人の課題、持ち味が発揮できるよう、学部の学級会でしっかり提起する。
- ③ 訪問先でも、行事でのとりくみを生かした内容にし、行事への見通し（子どもも、指導者も、保護者も）をもっていく。

- ・ とりくみの経過を大切にしてい。当日来れないことも考えて。
- ・ たくさんの教材をもって。(行事などで使うものを利用して)
- ・ 訪問先では、そのままをするのは無理なので、短縮したり、簡素化したり訪問版を考える。
- ・ メッセージテープをつくる。七夕音楽祭でうたわれているうたをテープにふきこみ、又、その中には「〇〇ちゃん、がんばってるかなア……七夕音楽祭には、調子を整えてきなよ！」と、学級の先生たちの励ましの声を入れていく。(これは、学期の終わりにもとりくみ、休みの間に聞いてもらったります。学校と訪問生、そしてお母さんたちをつなげていく、大切なとりくみとして…)

④ 当日、子どもの発表以外はとりくみを控え、教室でしっかり休養してい。

- ・ いろいろ見せたい、聞かせたいの思いはありますが、“欲ばらない”をあいことばに。

次に、どんな発表をしたのかを、報告します。1曲だけ、実際に紹介します。



(2) 発表より — 当日の指導案からの抜粋

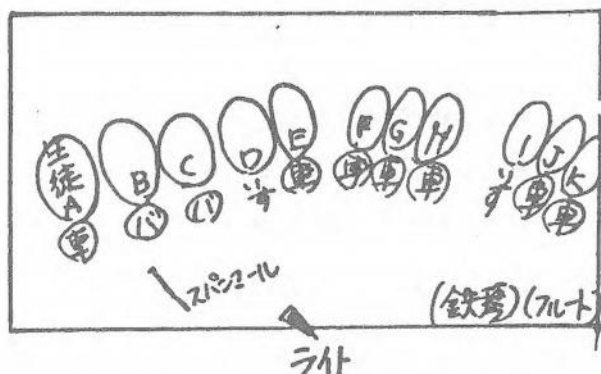
(ねらい)

- 日常の授業や、とりくみの発表の場とする。
- うた・リズムの授業を学級全体で検討し、作りあげる場とする。
- 大きな場所、沢山の人の中でも、自分の力が表現できる(刺激を受けとめられる)力をつけていく。
特に訪問教育生。
- 保護者や、教職員・他学部の生徒に、タンポポや、ヒマワリの児童・生徒一人一人の様子や、がんばり、とりくみを知ってもらう場とする。

(本番時間)

10:15~10:35

① 星めぐりの唄 (全員)



- ・ 室内灯消え、真暗になったらスパンコールをもってうたう。(移動しながら)

♪ 前奏・鉄琴・フルート

ナレ、「星空のコンサートの始まり」

♪ 前奏・鉄琴・フルート

ソロ、(1・2番)

♪ 前奏

全員 1・2番

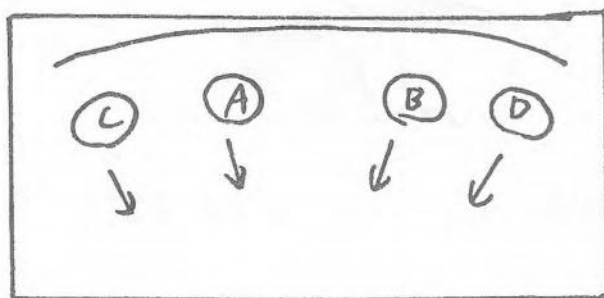
最初は、星めぐりの唄。スパンコールをつかってやります。生の音を聞かせてやりたいと、フルートや鉄琴をつかって前奏をやりました。

真暗なシーンとしたところに、フルートの音が入っていくと、子どもは思わず「何?」といった顔をします。

音は単音から始まって、一人の先生のうたいかけから、入っていきます。

そして、星空が展開されています。

② ウンパッパ (ヒマワリ学級+訪問生) — 首がすわっていない子中心 —



一 番 ♪ ナレ、「ゆらり、ゆられて、ウンパッパ

笑顔こぼれて、ウンパッパ」

うたに願いを・・・

4人、すわったまま抱きかかえの

ゆらし

二 番 ♪ 心の中をのぞいて・・・

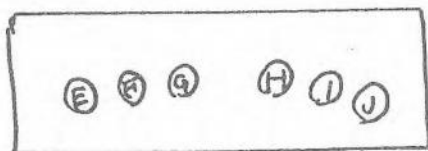
A・Bの生徒前に出てゆらし

次は、「ウンパッパ」です。ここでは、ゆらしをします。ゆらしは、みんな、同じやり方ではなく、たてゆれが好きな子、よこゆれが好きな子・・・と、1人ひとりにあったやり方でやります。

三番目 うたに願いを……

C・Dの生徒前に出てゆらし

③ かわいい、あのこは、どこにいる。(たんぼぼ学級+訪問生)



ナレ、「オーイ、みんな、どこにいるの？」

どこにいるの——?!」

※ 子どもたちが見えるようにしながらも、教室のように、前から、働きかけるようにする。

子どもたちが、より自分を呼ばれているように捜している先生のしぐさもオーバーに。

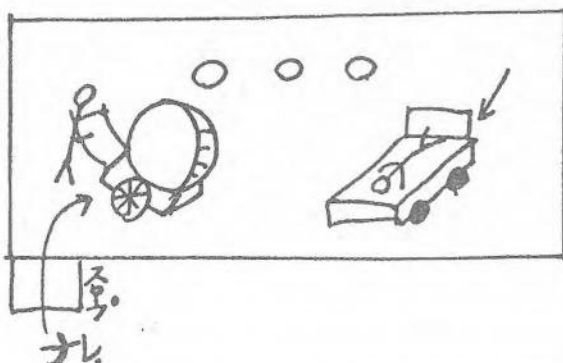
※ Gの生徒は、途中、出番より、車イスからおりて、大好きな、S先生が前より、働きかけ、追っかけたり、「イナイ、イナイ、パー」をする。

※ 音・声の途切れがはっきりするよう、うた、伴奏を、ピタッと止める。

三番目の曲は「かわいいあのこはどこにいる」です。今年度に入って、たんぼぼ学級は変わりました。座位がとれる子どもも来ています。健康上留意の必要な子どもたちですけど、確認面では、自分を意識したりできるので、こういうとりくみをしました。インドネシア民謡で、かえうたにしました。元気な、みゆきはどこにいる？

△ △ と、うたったら、脳性小児マヒで、緊張のきつい子ですが、「ア・ア・ア」とこたえ、学校中でひびく大きな拍手をうけました。そういう声や身ぶりで表現できる、自分を意識できる子どもを中心にした発表でした。

④ 山の音楽家



ナレ、「おまたせしました。山の音楽家の登場です。」

次は「山の音楽家」です。うつぶせで、力が発揮できるようになった子どもは、うつぶせになったまま、出場しました。前にキーボードをおき、かすかに、手を動かすと、音がきこえてくる。その音に、ホッとする。その横にいる先生が、「あっ音が出たね」と、教室を、そのまま、舞台の上に、もっていきました。

1 番 (男性合唱)

♪ 私しゃ音楽家、やんちゃアツシ

上手に太鼓を、たたいてみましょう……

2 番 (男性合唱)

♪ 私しゃ音楽家、リュウイチロウ

上手にピアノをひいてみましょう……

3 番は途中よりフルートをたっぷりきく

⑤ 朝が光っている (創作曲) 全員

ナレ「ベットの上で病気と闘っている、シノちゃん、ススム君

そして、その生命をしっかり見守り、励ましている家族

お母さん……その姿をうたにしました。」

ソロ — ラスト、全員で

⑥ 花まつり 全員

ナレ「フィナーレです。楽しく、元気にう

たいましょう。会場みなさんも、手拍子

を！」

※ 車いすから、降りて、だく子、立つ子な

ど、リズムを全身でうけとめられるよう。

そして、6 番目は「花まつりです。」

にぎやかに、このうたで終わりました。

(3) とりくみを終えて

「重心」学級子どもたち、どの子どもとても良い表情でした。そこで、訪問教育生はどうだったでしょう。

アツシ君は、ねたままなら力が発揮できると、リクライニングの車いすにクッションを入れ、ほぼ水平にした型で参加。自分の名前をよんだら「アー」と応え、手もほんの少しあがりました。会場からは大きな拍手がいっぱいありました。メグミさんは生活リズムがまだついていなくて、よくぐずって泣くことがあるのですが、この七夕では、訪問教育生で聞くいつものうたに、あわせてゆられ、本当に良い笑顔を出していました。

そして、2人ともあの一番最初のスパンコールのきらめく光をみた時は、とても真剣なまなざしでした。

何より、行事のあと、メグミさんは、教室で少し睡眠がとれ、2人とも家にかえってからも、熱が出ずにすんだことが、この行事の成功といえるでしょう。

残念ながら、体調が整わず参加できなかった、シンジ君も訪問先で、これらの練習をし、いっぱい笑顔を出していました。やはり、当日だけが行事ではないことをあらためて押さえていきたいと思いました。

「重心」の学級ができ、「今度のとりくみはどうしょう!」「あんな大きな行事、子どもたちが参加するのは、無理やわ」と、行事への参加、不参加から、論議をはじめました。今回のように、舞台の上の子ども
の小さな変化でも、会場みんなが、よろこび拍手をしてくれた事に、これまでの積みあげの大きさを感じ
ました。学校の中で機会ある毎に、訪問教育や「重心」の課題などはなしてきたこと、あるいは、「重心」
学級の存在、そのことで浸透してきたのではないだろうか、というのが私の実感でした。

そして、「先生!『重心』の発表が一番良かった!」と、教室へかけこむ「重心」のお母さんたち。その
うれしそうな顔をみると、行事は、お母さんたちの「うちの子、障害重いけど、見ててなあ」「こんなに、
身体いっぱいうたっている」「こんなに生きているんやで」という思いを、みんなに伝えていく場である
と同時に、お母さんを励ましていく場でもあったのではと思いました。

残念ながら、高等部には、訪問教育がありません。

先ほど、修学旅行で紹介したススムくんは、今年卒業しましたが、実は、卒業後まもなく、肝機能が低下
して死の淵をさまよいました。

その後、もちなおしたものの気管切開をして、今、自宅で療養中です。下痢が続いたり、体のバランスが
崩れて、緊張がすごくひどくなって大変な状態です。

教育の重みは、生命の重みなんだと強く感じます。なんとか、高等部を設置していかなければと思います。

この七夕音楽祭をとりくもうとしている時に、後退性の病気をもっている子どもが入院したり、更に先ほ
どいった卒業生のススム君の入院という心痛む事態がありました。本人をはじめ、まわりの人達の懸命な看
護がありました。

ススム君のお母さんは、「もう一度、修学旅行での保津川下りにいこう!」と励ましておられましたが、
ススム君が最も苦しんでいる姿をみて「こんなに苦しむんだったら、点滴をはずして、楽にしてやろうか」
と気の強いお母さんでしたが、そう、口にしてしまうほどでした。でも、その長く暗い夜をへて朝日が病室
の窓にさしこむ時、「又、がんばらねば」と、お母さんは気持ちを立て直されたそうです。その2人のお
母さんの姿、話をきいて、大下先生が歌にしてくれました。「朝が光っている」といううたです。思いをこ
めて、七夕音楽祭の5番目でうたいました。

そのうたをうたって終わりにします

「朝が光っている」

作・大下靖子

ホラ、見てごらん、朝が光っている
 ホラ、見てごらん、朝がそよいでいる
 長い、幾晩を、眠れぬあなたを
 抱きしめ、抱きしめ
 母さんは、いっそ……
 その苦しみ、止めてやれるならと
 あえぐ、胸に手をかけたことだろう
 ホラ、見てごらん、朝の光の中
 小さな生命が、生まれて育つ
 ホラ、聞こえるよ、宇宙のどこかで
 小さな星が、生まれて、光る

朝が光っている
 (スム君と、リちゃんと、そのお母さんに捧げる)

曲・詞 大下靖子

ホラみてごらんあさがひーかって
 いるホラみてごらんあさがそよいで
 いるながいいくばんをねむれぬあな
 たをだきしめだきしめかあさんはいっ
 そそのくるしみとめてやれるな
 らとあそびあぬにてをかけたこと
 だろうホラみてごらんあさのひかりの
 ほかにちいさいのちがうまれてそ
 だっホラきこえるうちゅうの
 どこかちいさい星がうまれて
 ひかる

『触れる』『感じる』『試す』

栃木県立富屋養護学校

谷口順子

はじめに

『今ここに在る』ということ、これは誰にも共通です。

どういう状態であるか？そして、それをどう受け止めているか？ということは、一人一人皆違っています。でも、何かを感じていて、それをどうしたいと思っているのか。やがてどのように変えて行きたいのか？ということが、生きてゆく私たちの日々の課題です。

こういう見方をすれば、訪問のこどもたちにとっても、それが課題であって、私たちと訪問教育の子どもたちがピッタリ重なり合える原点になると思うのです。同じ土俵で同じものを感じ合い、何か同じものを訪問の子どもたちと一緒に探求し続けたいというのが私の希いです。これから報告する私の研究は、その発端のところからお伝えした方がいいと御子柴先生からも、斉藤先生からもアドバイスをいただきましたので、私事で大変恐縮なのですが、初めに過去の経験を述べさせていただきます。

1. 障害児教育への契機

昭和37年5月10日。私が大学4年生で教育実習に出はじめた実習3日目の出来事です。身体も小柄で、ご覧のとりの性格ですべてこどもとすぐ仲良くなって、子どもにまみれ遊んでしまう私です。どうがんばっても、先生は向う側で生徒はこっち側というそういう距離が保てないのです。その時も子どもが心をゆるしてしまったことからハプニングがおきてしまったのですが、……子どもたちをフレームのまわりに集めて『温室の役割』『春の球根のようす』という授業を終った時、私が説明を終えて立ち上がろうとして中腰の時に、N君がちょっとふざけて、私の後から肩に手をかけて、ふいに後に引いたんですね。私は足場が不安定な所に居たのでそのまま『デーン』と仰向けに倒れてしまいました。そしてそのまま意識不明、子どもはさぞ驚いたと思うんですが……気が付いた時は保健室のベットに運ばれていました。

たったそれだけの事だったのですが、間が悪かったのでしょうネー万人に一人もそんなところは打ってこないという致命傷の部分に血腫が出来てしまい以後7年半という長い間リハビリに専念しなければならなかったのです。今にして思えば、本当によくぞ回復したと不思議にさえ思えます。CTスキャンのような有能な器機がなかった頃のことですから、血管造影剤を用いたアンギオウという大変苦しい検査の結果、脳下垂体床下部にアンズ大の血腫が映し出され執刃不能。手のほどこし様なし、という診断で家に帰されました。

一時は本当に植物人間のような状態になり、目も見えなくなり、言葉も思うようにしゃべれなくなりました。

勿論食べ物も受け付けず点滴に支えられていたのですが、その時のボディイメージが誠に特異なものでして、熔鉱炉でまっ赤に溶けた鉄を頭の中に流し込まれたかのような猛烈の痛み、熱いようなガンガンとした苦しみの中で、体がまったく意識から消えていました。

感覚と意識の中で確認出来たのは手首から先と足首から先だけで、体幹と腕の部分はいくら感じようとしても意識の中に感じ取れませんでした。視力は落ちましたが自分の手が動いているのは見えました。でも「動かしている」という感覚は全く感知できませんでした。つまり「今ここに在る」という厳然とした事実を感覚として受け止めることの出来ない自覚症状を体験したのです。「見えていること」と「感じとして受け止めていること」が全く違うという脳神経の障害を不可解なものとして確認しながら、ままたらない日々を潜り抜けて来たのです。

ADLの全てを他人まかせの状態になりながら意識だけがちゃんと働いている、ことの辛さ、その残酷さをよくよく思い知らされました。どんなに大変でも、生きていることを止められない厳しさと闘いすべてをなめつくして再起の道をいただいたのですが、一番厳しかった事が医者¹の宣告でした。「この人はもう治りません」といとも簡単に言い渡され、ではどうすれば良いかという手だてなど全く示してもらえませんでした。現在の私なら（その後いろいろ勉強しましたので）その時のアンギョウの結果から見て、本当にその時点では「ダメ」という言葉が適当であったと自分も納得できますが、検査の時点で「ダメ」だったのであって、それからどのように変わるか、その奥にどんな底力があるか、というような事にはまったく気にも止めない現代の医学に大きな矛盾と抵抗を感じています。リハビリテーションにしても「座れるようにする」とか「歩けるようにする」というゴールは示すが、そこに到達する手だてを示してくれないのが現在の医療の問題点のように思います。

訪問教育という分野の該当児の大半が医学に見切をつけられた子どもたちと言えるでしょう。この点を大きな問題点に据えて、諸々の体験を経て私が編み出した新しい係わり方をご紹介します。

2. ファシリテーションボールによるリハビリ

この研究は教育的見地から「人間行動の成り立ち」を探究しようとするもので、リハビリテーションについても、日常性や機能性という観点よりも、自主性、選択の自由、誇り、生き甲斐等々という心理的側面のリスクを主たる課題として取組んでいます。従って評価の方法も、脳波、筋電図、心電図などでは読み取りにくいと思われる意欲や自主性（字配り、書体など）選択の自由（筆圧、墨量、運筆速度などの加減）誇り（作品の完成）生き甲斐（社会的評価）などが、保存的に読み取れる毛筆書字という方法を用いています。

教具として研究しているファシリテーションボール（空気圧を30%～90%に調整したラージボール）は、無意識のレベルで、生命作用に深く係わっている重力や大気圧に着目したもので環境と生命の間におこるいろいろな自然過程を力まずして促進させてくれる、ということを体験的に実証しているのです。

着想はきわめて単純で、「重い脳性マヒ児の変形や硬縮をできるだけ少なくしてやりたい。」というねがいから自分の力では運動することのむづかしいケースでも、継続的に、意図性を含んだ動きを反復できる場面として手近かにあったボールの空気を減らして活用した結果、予期せぬ効果がみられ、別のケースにも、次々に良い結果がみられることから改めて考察を加えたという次第です。

係わりの過程で大切にしていることは、人間関係で、教える者と教えられる者という関係を脱し、環境条件の設定によって生命体がどのように反応し、学習者の人格がどのように呼応するか、という事を読み取ってゆく過程で、指導者が教えられることの方が多いという共存関係の深め合いをねらいとしています。

多くのご批判、ご意見のいただける事を希望して、過去5年間にわたり日本特殊教育学会に報告した実践のまとめを紹介します。

観 点

人間行動の基盤となる「感覚」と「運動」に焦点をあてinputされる刺激の量、その受容の度合い、outputされる反応や行動の変化等に着目し細かい記録を累積し、感覚の統合と自発行動の触発に有効と思われた運動学習を一連のプログラムとしたものです。

この方法は、上肢訓練・下肢訓練などのように身体の一部に働きかけるのではなく、生命体を自然の系の中で全体的にとらえ生理的側面と心理的側面に同時に入力される学習場面をつくり、視覚、聴覚、触覚、固有覚、前庭覚などに並列的な学習条件を構築することがポイントです。

促通（facilitaion）とは

1. あらゆる自然過程を促進すること
2. 明確には、インパルスの通過をもって神経細胞内に生み出される効果のこと
3. 神経の抵抗が減るように導き、同じ刺激でもまえより容易に反応が引き起こされることであります。

空気圧を下げたボールが、容易に、しかも合理的に促通効果をもたらしてくれることから、空気圧を下げたボールを私称「神経筋促通体」（ファシリテーションボール）と名付けています。

現在活用しているファシリテーションボールの大きさは直径40～150cmで空気圧は30%～90%程度としてい

るが、大きさの選定は、おおよそ学習者の発達に反比例し、圧力の調整はそれに比例するようにセットされた時の効用が高いようです。

ファシリテーションボールによる刺激の質と量

パスカルの原理によりファシリテーションボールに乗ると「学習者の体重に等しい反作用の触圧刺激が接触面全体に均一に入力される」この刺激の質が学習者の安堵感、解放感となり望ましい応答関係が得られる。

ファシリテーションボールを用いて訓練すると

1. 反射レベルで反応する要素を含んでいるために。
2. それは生命機能を必然的に賦活させると同時に、「変化に対応しようとする意図」が触発される。

ファシリテーションボールの効用を高めている鍵は

1. 日常的には意識化されない重力との係わりが有意味に意識化される。
2. 日常的肢位・姿勢では使われない筋や筋群が必然的に、しかも総合的に使われる。

という二点にあると思われる。

ファシリテーションボールの効用は

1. 小さな力で大きな動きをつくることができる。
2. プログラムしようとする動きのベクトルを自在にコントロールすることができる。
3. 学習者の意図とは別に、継続的な全身運動が入力されるため、新陳代謝を促進し手足の冷えが改善されたり、便秘が解消されるなど生理作用全体が賦活される。

ファシリテーションボールの物理的特性

1. 可塑性・可逆性による不安定さの中に1点の安定感が秘められている。
2. モーメントアームのベクトルを自在にプログラムできる。
3. 活用法によって静止的運動、協応的運動、瞬発的運動と多面的な学習ができる。
4. 学習者の動きにファシリテーションボールがフィットしているため、寝返りや、起きあがりのような連続動作の一部を静止的に取り出して学習することができる。

3. 実践事例

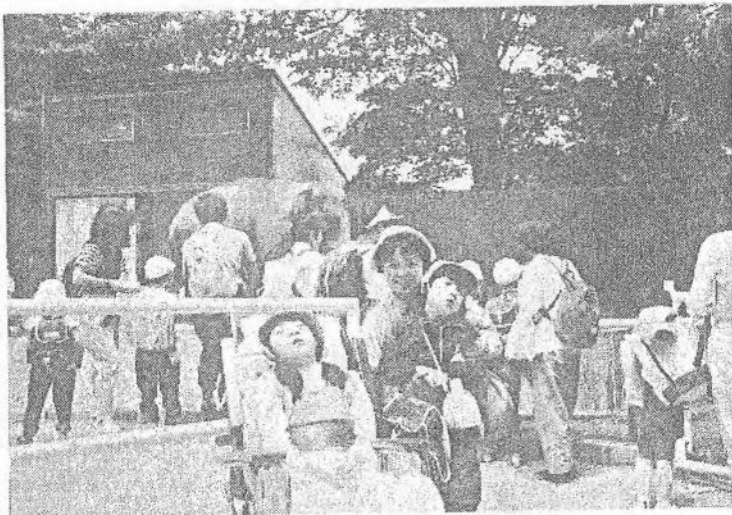
平成元年度訪問教育



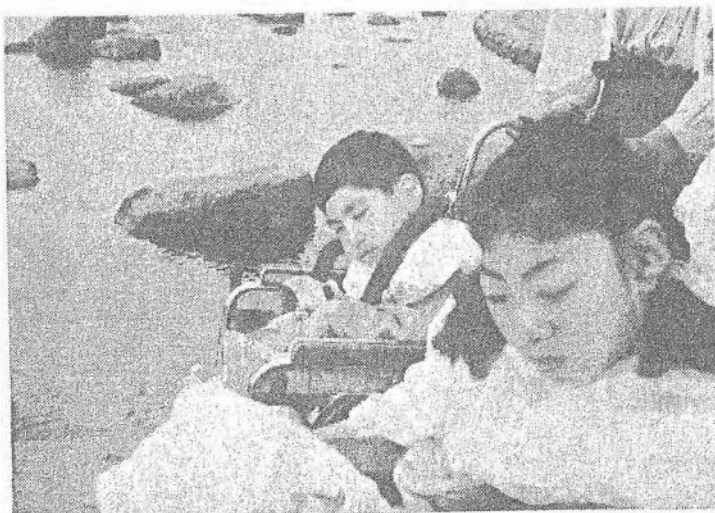
仮死2度で生まれたN・I（7才）小頭症

3ヶ月の時、慢性硬膜下血腫のため前頭部被術2回、術後後遺症による
點頭てんかん

4月入学式 5月動物園遠足 6月グリーンパーク遠足 7月七夕祭り



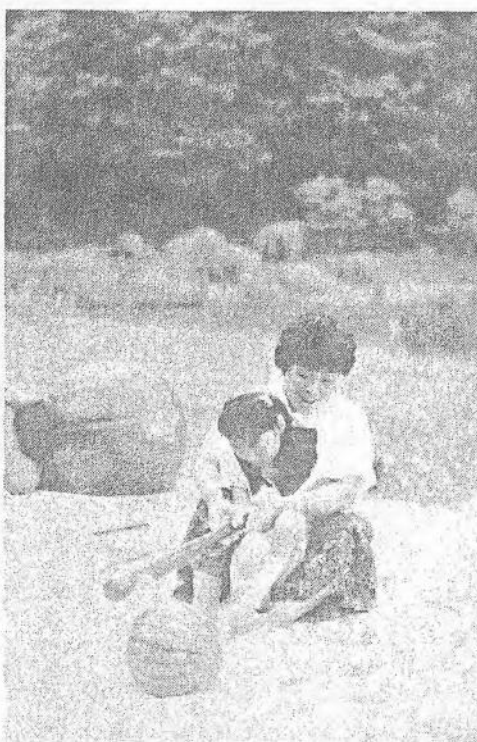
行事に参加してもみんな眠っているN・I。
異状緊張が強く抱くのがむずかしい。触知
覚に異常があり背中、下肢、顔などさわら
れるのをいやがる目も見えず、体に触れら
れる部分にも限度のあるNIと手探ぐりの
学習を始めた。最初は『どこでも触らせて
もらえるように』『安心して抱けるように』
という2つの目標を立て小さなボールで
部分的な刺激を入力した。



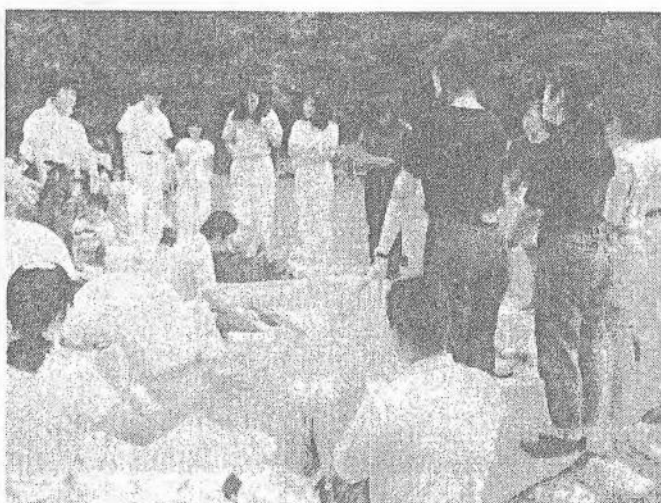
5月には緊張もだいぶやわらぎ、触防衛も少なくなってきた。手のひらで触ることと聴覚に訴えることばかけを一致させることにも挑戦した。

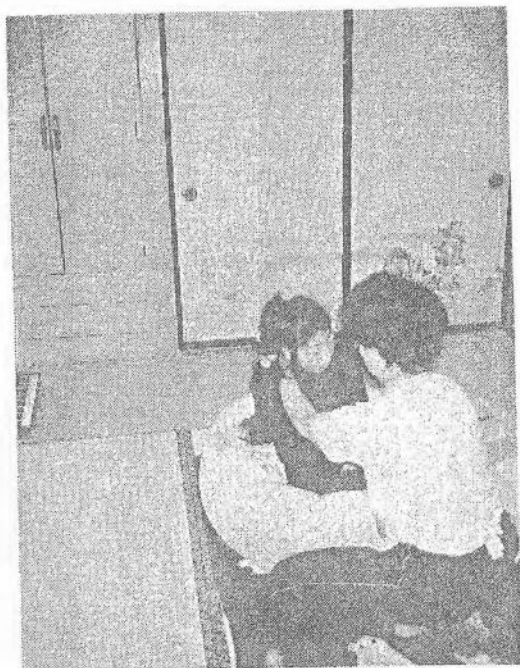


手首、手指にぴったり指導者の手を重ね両方の手でやさしいボールを持つことばかけや音楽のリズムによって全身のゆれに合わせた手のひらへの入力は大変有効で、とてもよい応答反応が確認された。



夏休み(7/29)の野外学習にもファシリテーションボールを持参、広い野原の風に吹かれて全身の動きを実感した。ボランティアの学生さんたちと覚えたばかりの『小さな生命』を合唱し子どもたちに心を注いでくれる仲間をつくった。

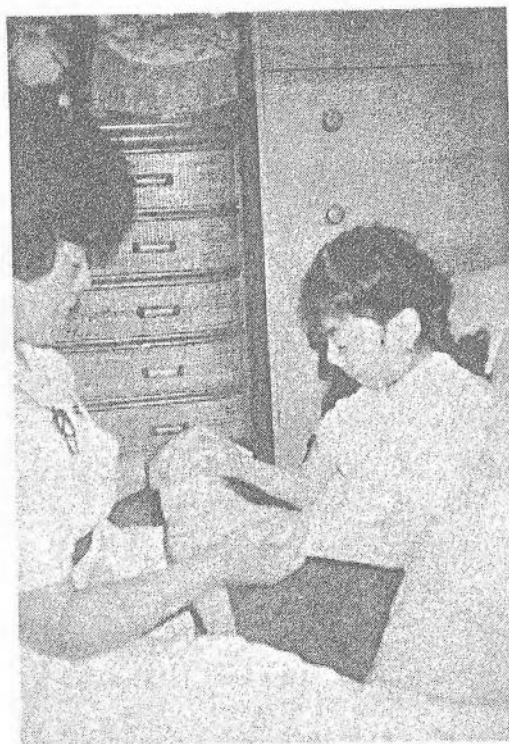




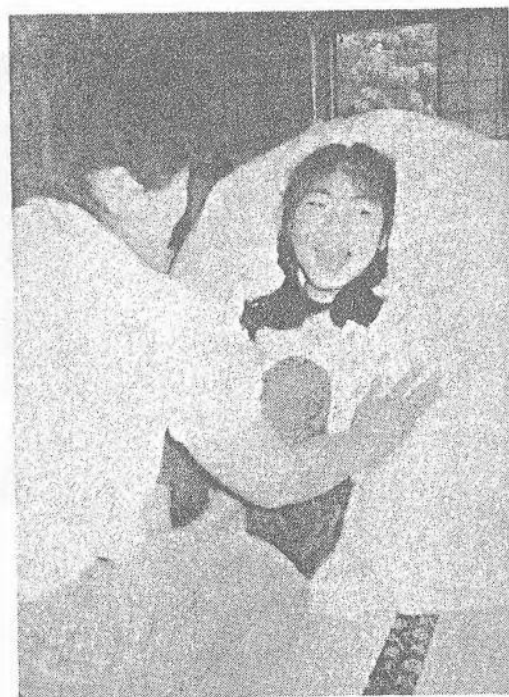
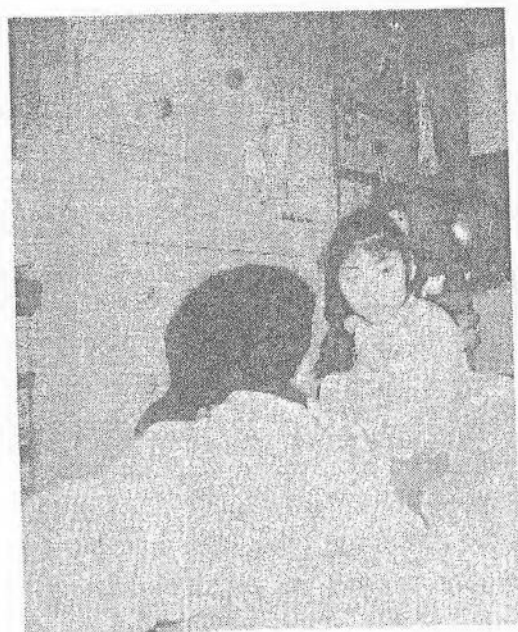
6月 こんな事が出来るようになるなんて始めはとても想像できなかったNI

ファシリテーションボールからの抗力を全身に受容し規則性のある前庭刺激の効果があり、そり返し緊張は

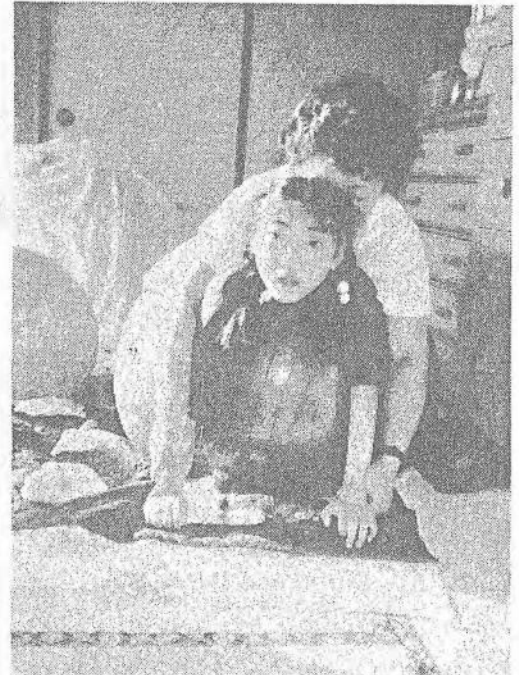
ほんとうに少なくなった。首もしっかりして来て、こんな肢位姿勢がとれるようになった。



有効な学習プログラムはポジショニングによる固有覚のちがいを綿密に追いかけてながら応答場面を伸ばしていったことである。



2学期は自信をもって見通しのある学習プログラムを立案出来るようになった。
部分的に単一刺激の入力しか出来なかった1学期とは異い、腰帯と頭位・肢位の関係を同時にプログラムしたり、肩甲帯と手指・頭位を同時にプログラムすることが可能になった。



◇ 保護者からの連絡

一 学 期

入学して大きく変わった事がたくさんあり、うれしく、とても感謝しています。

○体温の調節ができる様になり昨年は一日中冷房をつけていましたが、今は午後暑い時(ねむる時)つけるだけになりました。熱も出さなくなりました。

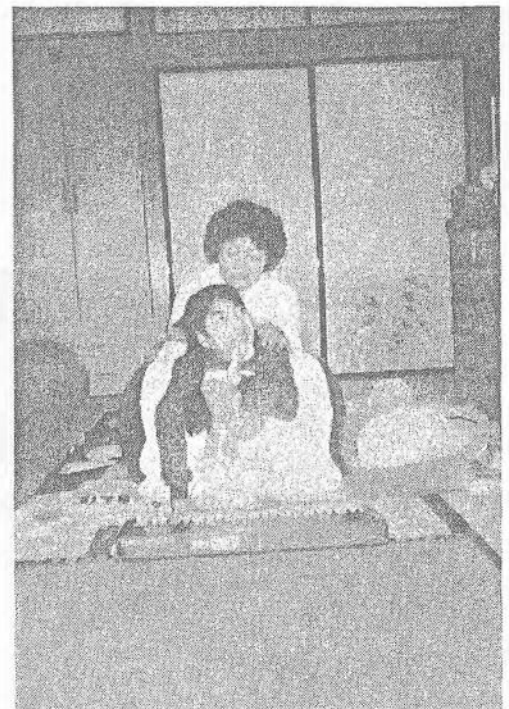
○夜も長い時間ねむれる様になり、この夏休み中も体調をくずさず生活できました。

○日中起きている時間が長くなり、笑顔も多く表情も豊かになりました。これから寒さにむかうので風邪などひかせず2学期も学習に励みたいと思います。

ポジショニングの学習に意味付けして、音の出るマット

(写真上)でBGMに合ったリズムを膝や手首で発信し自分の出した音を自分で楽しむ自己発信・自己受容の場面づくりも有効な学習であった。更に一段階学習内容をアップし、手にふれるものをポーターサウン

ドのキーにして刺激の微妙なちがいに注意力が注がれるよう、自己発信の内容をコントロールし、受容域を拡大するよう努めた。視力のないNIが自分の発信する音をしっかり受け止めようと耳を傾ける時、視線が反射的に斜上方に向けられる事など大脳の連合反応が確認され興味を覚えた。



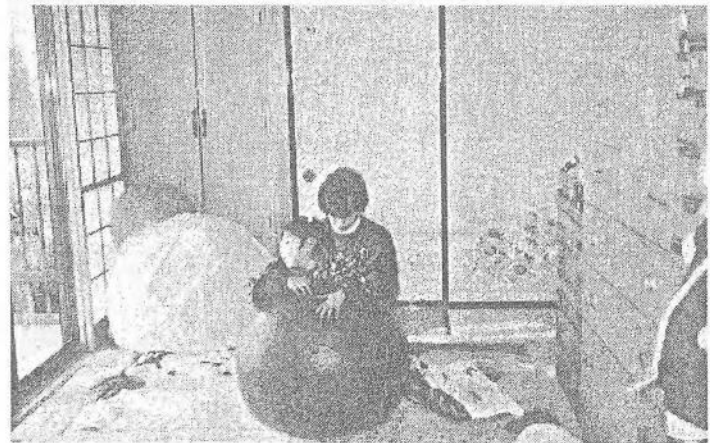
ドのキーにして刺激の微妙なちがいに注意力が注がれるよう、自己発信の内容をコントロールし、受容域を拡大するよう努めた。視力のないNIが自分の発信する音をしっかり受け止めようと耳を傾ける時、視線が反射的に斜上方に向けられる事など大脳の連合反応が確認され興味を覚えた。

3学期『こんなに成長しました。』と大きな声でみんなに報告したくなるほど確かな歩みを示してくれたN I。この時期に最も力を入れたのが抗重力刺激の統合である。このように脊柱を斜前方に傾けた姿勢で頭位と肩甲帯及び腰部で重力を受け止めるポジショニングを毎回20分ぐらいはつくるよう心がけた。



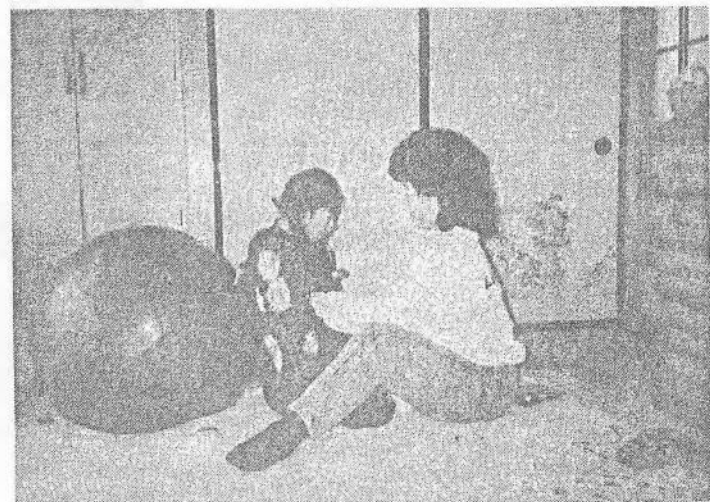
学習の途中で眠くなる時はこの姿勢で小休眠をとった。

臓部にかかる重力と腰部部の骨格と筋の相互関係を綿密に追いかけてながら確実な応答場面を伸ばした。



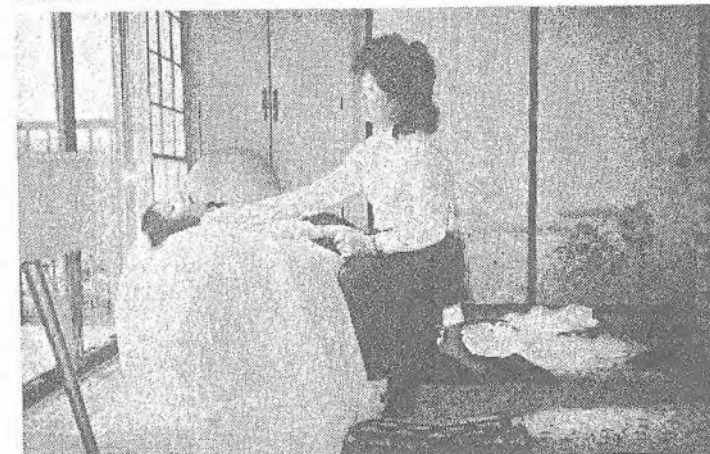
正中線に対し体位が常に左右対称になっているようにすることは、欠かしてはならない必須条件である。

肩甲帯と頭位の学習をプログラムする時は、上肢の肢位に細かい配慮をし肘関節・手関節が必然的に機能するような条件設定をすることが最も大切な事である。



最後の写真は一年間の学習の成果を何より明らかに示すものである。

全身のリラクゼーションが完全に成立し、音楽を楽しみながら、腰部をキッチリと伸ばし水平位を保った上で、膝関節が脱力され従重力の90°位に保持されている。この筋緊張の分離と統合が1年以内に獲得された事は、N Iの状態から判断して奇跡に近い成果と言えるであろう。



睡眠覚醒リズムの変様

A. かかわり前の睡眠状況



(1988.4~1989.1)

B. かかわり後の睡眠状況



(1989.2~1989.11)

※ 宇都宮市立病院の睡眠覚醒リズムの記録

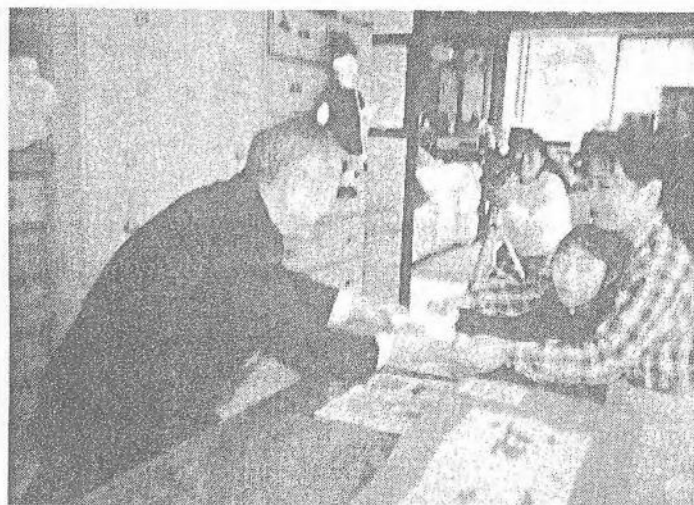
横軸を時間軸とし縦軸を日変化として、眠っていた時間を実線で示した

筆をにぎり、緊張と弛緩のコントロールとポジショニングによる応答のちがいを確かめるためにプログラムしている毛筆書字（学期1回）の成果がはっきりあらわれ、宇都宮・河内地区の書初展で賞状をもらった。ひら仮名で『へいわ』とかく課題だった。

左図で明らかなように睡眠と生活域のリズムが安定し、体力が増し、定期検診以外、病院



にかからなくなった。こんなに立派な姿勢で（写真左）座位を保持（一部支持）し話しかけることに表情で応答できるようになった。



入選

宇都宮市立病院 小児科

奈良部育世

賞状

判読できる文字にはなっていなかったが、紙面全体のフィーリングはまさに大僧上の書いた梵語のようで味わい深いものだった。校長から賞状の伝達を受けるお母さんの表情を見て下さい。これに勝る喜びはないと思います。昨年までは内気で暗い生活で、どこにも出がらなかったというこのお母さんが、伸々と明かるい生活になったと、おばあちゃんが涙を流して喜んでくれたことを、上の写真が物語っている。

宇都宮市立病院 宇都宮市立病院 宇都宮市立病院



平成二年二月五日

あなたの本会主催の第四回
宇都宮市立病院 宇都宮市立病院
頭書の成績におめでとう
よすてきに賞状を贈ります

両親揃ってひまわり号に参加したり、障害者を招待してくれた明治大学マンドリンクラブの定期演奏会で、ジョイントしたデュークエイセスの方々に花束贈呈の役を果たすなど、お母さんがすすんで外に出るようになった。更に福祉行政に対する希望意見を述べて市を動

訪問教育、週4回に

身体障児の親ら要望実現

【福見】勉強できる日が二倍に増えました。身体障害の程度が重く、普通学校に通えないために、週一回の訪問教育を家庭で受けていた児童が、新学期から万町の市総合福祉センターで週四回の教育を受けられるようになった。

今回の措置は個別訪問学校の二人の児童が一緒に指導を受けられることを条件に実現した。今回、週四回の訪問教育が実現したきっかけは、昨年十二月、市通園ホームのOB会（親たちの会）結成報告会の席上、開成市長と障害児の保護者の懇談が行われ、そ

の際、府所町の市長と部局の訪問教育の回数を増やしてほしいと市議会に対して「お願い」と申し入れをしたことが、川市長に訴えた。

川市長もその場で前向きな対応を約束、訪問教育を受ける施設として市総合福祉センターを無償で借りられることになり、普通教育を派遣している県立富田養護学校から



市議会議員の要望で、訪問教育の回数を増やしてほしいと市議会に対して「お願い」と申し入れをしたことが、川市長に訴えた。



89 走れ
UTSUNOMIYA
ひまわり号!



1989年10月22日(日)
主催 走れひまわり号 宇都宮県庁をめぐ



かし訪問教育の新しい取り組みをつくってくれるなど、お母さんの変化も著しいものだった。子どもが変り、親が変り、地域が変る。そんな働きかけが出来る訪問教育

の妙利をしみじみ実感させてくれたN・Iに心から感謝している。皆さんもこのような実績をつくってくれるファシリテーションボールを活用してみて下さい。次にその理論を少し述べておきます。

4. 訪問教育で実践するについての視点

中枢神経の指令系（遠心性神経）に重度の障害を持つと思われるケースに、求心性神経への刺激によって『意識すること』『意図すること』を体得させ、主体的な人間行動を触発することをねらいとして学習者が、『触れる』『感じる』『試す』ことのできる運動環境として自在に変形するファシリテーションボールからの抗力をプログラムし協応運動、静止運動、瞬発運動などの訓練を行なう。書字運動によって主体性を評価する。

実践の仮設

仮設 1

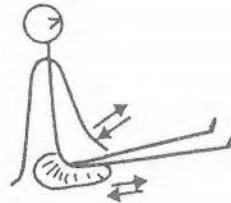
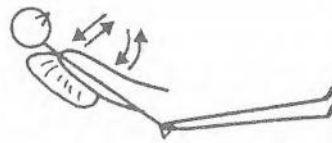
「人間はハードウェアとしては環境に対し1個の閉じた系であるが、ソフトウェア的には開かれた系として機能している」（時実利彦著『人間であること』より）

人間としてのハードウェア面に、改善の余地が期待できないケースでも、ソフトウェア面に入力される刺激によって予想外の行動・動作の改善が得られる。

仮設 2

「人間の多くの行動は生体の内部・外部環境からの刺激によって起り、これらは種々の感覚受容器に加えられた刺激が原因となっている」（中村隆一・斎藤宏著『基礎運動学』）より、本研究で着目しているのは体性感覚で、皮膚に分布している外受容器（触覚・圧覚・温度覚・痛覚）と、筋、腱、関節、前庭等に存在している固有受容覚（体位や姿勢・運動の制御）についての刺激をプログラムした。

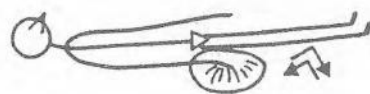
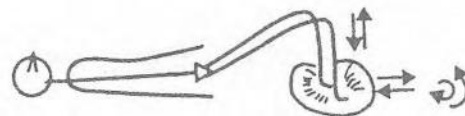
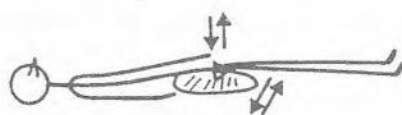
意識下の入力 ⇔ 身体の静止、運動の方向と規則性



ファシリテーションボールの大きさ、
空気の内圧等を調節しながら次第に刺
激の程度を増す。意図性を加え身体各
部の相互関係、また各部の運動の速度、
さらに支え等の外部抵抗をアレンジし
運動感覚を体得させる。『運動・動作
を効果的に行なうためには、体の各部
位の相対的な位置、重力方向と体の関
係を知る必要がある、これらの情報は
筋、腱、関節、迷路などにある固有受
容器によって、受容されている。』

(『基礎運動学』より)

初期の入力 ⇔ 重力による負荷を軽減する運動環境の設定



腰帯

バックミュージックを用いアンダンテ
のリズムの往復運動と、垂直軌動の
振動を入力

上肢・下肢

バックミュージックに合せアンダンテ
のリズムの垂直及び水平軌道の触圧
と振動に加えて、すりこぎ棒を回す
ように関節の回旋を入力

手指・手関節

患児の手に重ねるように介助者の手
をあて、手首・手指の運動を加え抗
力を実感させる。

5. 共感し合いたいこと

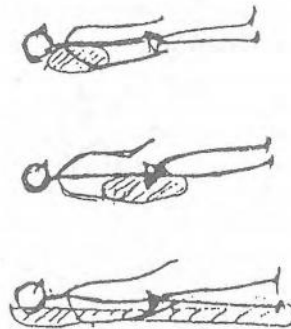
学習の原点＝生体反応

脳・神経系の機能に働きかけて学習を積みあげることが期待できないケースでは、その学習プログラムは外界との平衡反応として生じる生体反応を綿密に積みあげること尽きる。

抗重力感覚触発のステップ

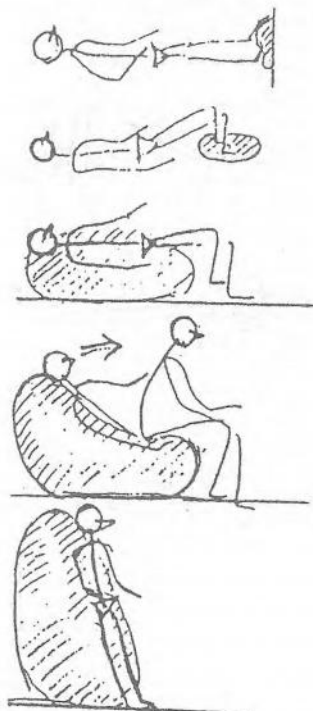
1. 分離と統合

下図のような可塑性、可逆性のあるファシリテーションボールを重力との接点に挿入し、ベッターと一面の中に埋没していたボディイメージを壊し、ファシリテーションボールの前後・左右で受容系の分離を実感させる。そのすべてが自分自信の、身の内であることを体得させる。



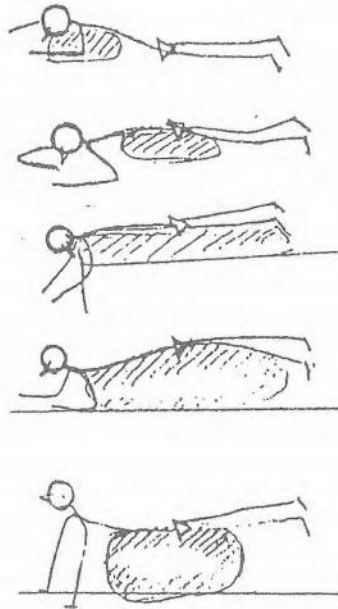
2. 自己発信・自己受容

下図のように足のひらを発信点とし体幹の背面を受容面とするようなフィードバック系をつくり、ゆれと振動を入力し順次体幹を起こしてゆく。このようなプログラムによって反射的にまた意図的に重力に呼応することを体得させる。



3. 定頸と上肢の独立

背面と同様の分離・統合を触発する過程で挿入するファシリテーションボールを次第に大きくして、定頸と上肢の独立を促しながら、ファシリテーションボールによる重心変換学習へ導いていく。



感覚統合学習の必須条件

1. 人的条件（取組みへの希望と意欲）
2. 生理的条件（健全な代謝 —— 快食・快眠・快便）
3. 物理的条件（応答できる環境作り）
4. 社会的条件（順応できる受け皿作り）

何にも増して重要な事はたずさわる人たちのひたすらなる希望とたゆみない努力である。

本プログラムに意図された要素

1. 心情的要素

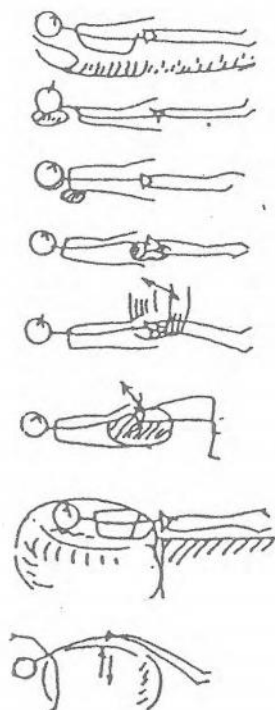
- (1) 満足を生む程度の挑戦と成功のほどよい配合。
- (2) ほどよい興奮により努力を刺激する。
- (3) 目新しさにより探索意欲を助長する。
- (4) 一人の子どもの反応が別の子どもの努力を刺激する。

2. 対人関係的要素

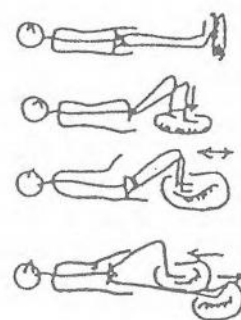
- (1) 一人ひとりの体験が自分自身のものであるように繊細な感情移入が出来るということが最も重要なポイントである。
- (2) 指導者と学習者がボールを媒体として一体感を深め合いながら進められるということがより効果を高める条件である。

展開の方法

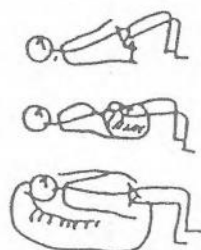
(1) 背面からの入力



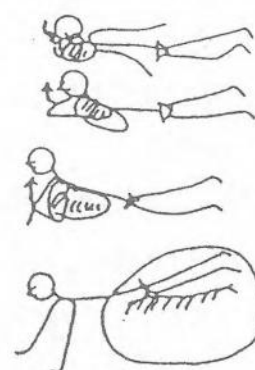
(2) 足のひらからの入力



(3) 腰帯と足のひらとの応答



(4) 腹臥位での応答



ファシリテーションボールの効用の評価として

1. 肢位や姿勢による微妙なバランスの変化や意欲の程度が、1目で読みとれる上に、意図的に総合的に筋群の使い方をコントロールしようとする自発行動の成否を評価する手段として（模倣動作としての）毛筆書字学習をプログラムしている。
2. 毛筆書字の過程には姿勢の保持や上肢の機能の他に、
 - (1) 選択の自由（紙面の使い方、墨量の加減、運筆速度・筆圧の加減）
 - (2) 創意（意欲）
 - (3) 生き甲斐（社会的評価）など学習者を主体とした評価リスクが多面的に包含されている。
3. 毛筆それ自体の特性により、1本の筆で細い線も太い線も、直線も、曲線も、自在に表現できる上に柔軟な穂先を鋼のようにするといものとして活かし得る意図的な働きが、動きのリスクと一体となって評価できる点が本研究の妙味である。
4. 自在性を『意図によって駆使する』という点で、ファシリテーションボールと毛筆が共通のリスクを持っており、全身の運動を通し、ファシリテーションボールから学習した運動と感覚のコントロール法を、毛筆を通し上肢機能の意図的なコントロールのいかんによって評価するもので、文字を理解できない知能障害のケースでも模倣運動が出来れば、充分有効である。

事例と結果の紹介

対 象 児

(A) K k15才♂C. P	(B) MY18才♀C. P
首のすわり不完全、寝返りはできない。座位がとれず、三角架を用い腹ばいで学習、車椅子使用時は固定帯、固定板を使う、ADL全介助、言語障害 I Q32 (田中ビネー、S55. 検査)	座位保持可能、いざり四ツ這いで移動、車椅子使用、つかまり立ちができる。 拇指対向性なし、手首の回旋運動ができない。 言語障害、ADL半介助 てんかん発作頻発機能後退

取組みの概要

	ファンリテーションボールによる全身運動	毛筆による目的動作
59年度	週時数 8 時間 生徒数11名 教員 3名	週時数 2 時間 生徒数11名 教員 2名
60年度	週時数 3 時間 生徒数 8名 教員 3名	週時数 1 時間 生徒数 8名 教員 1名
61年度	週時数 2 時間 生徒数 7名 教員 2名	週時数 1 時間 生徒数 7名 教員 1名

動きとしての上肢の協応性を求めて

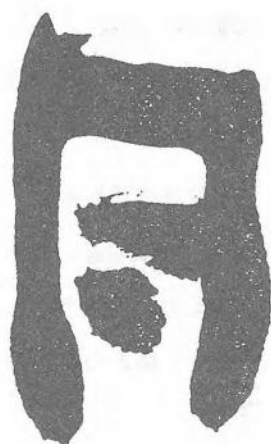
テ ー マ	内 容 と 方 法	心 身 の 適 応
1. 内部感覚と動作の呼応	筆を持つ、腕を挙げる、手前に引く、など	肩、肘、手首などの神経筋の促進
2. 外部条件と動作の呼応	半紙、筆、墨量などへの意識付けと気配り、など	目的意識と動作の一致
3. 始めと終りの意識付け	腕を持ち上げる、おろす、右に引く、止める、など	上肢の運動量、速度などのコントロール

意図性と動きの協応性を求めて

4. 確かな成就感の獲得	到達目標の確認、友だちとの比較など	自分の肢位や作品への自己評価
5. 個別プログラムの般化	毛筆の特性による学習内容の共通点で能力差をうめる	健常人と共通な内容の課題に注目する
6. 暦年齢相応のプライドに応える	模倣運動、模写を通しての自己表現	筆字の精神性を直感する
7. 評価と成果の累積	自分の行動、動作を自分自身で確かめる	運動のコントロールがそのまま文字の味となに残る

対象児 A の学習成果

1年生の秋、県展に入選し名前の刻まれた立派な盾をもらいました。



月

野沢養護学校高等部一年

木村 公彦

木村君の「月」は墨の色から受ける温もりと第二画のヨコが張りつめた線で作品全体をまとめている。
最後の二点の表情になごみと明るい夢がある。

対象児 B の学習成果

左は1年生の時、右は2年生の時です。



山河

野沢養護学校高等部一年 宮崎 美江



自力

野沢養護学校高等部二年 宮崎 美江

宮崎さんの「山河」は字の構えに一貫性がある。習字というより書のたのしみをおぼえる作品。
山の傾きながらハタラキのある表情、河の三水のムリのない置き方、可の表情の豊かさ、偶然の結果としても三水との照応で作品全体を大きくみせて効果的と言える。

宮崎さん「自力」は、澄んだ張りのある雰囲気にかれます。そして力強い筆、おさまりが見事です。

栃木県書道連盟副会長
毎日書道展審査会員
元栃木県立宇都宮女子高等学校講師
白石 湧

おわりに

重度の障害児の書いた作品を見ていると、無限の彼方の、本当に深い、何光年もむこうの原点にふれたような気がします。ことばをいただいて直立の姿勢で、2本の足で歩けるようになった人間の祖先から、ずうっと今日に至るまで遺伝子の中に引き継がれ、引き継がれしてきたもの。、私たちの、目玉が2つ耳と口と鼻とあって、手足がこういうふうに動いて、指が5本で、こんなことに関しては、こんな感じ方をするんだというように大きなペースで考えると「99.9%ぐらいまでは、みなさんだれも同じ」だと思うんですね。そして「さいごの0.1%か0.01%のちがいが、一人ひとりの個性であり、お顔の違いであり、障害の違いであり、能力の違いである。というようなのが現実ではないかな？」という考え方に自然させられませんか？

そうしたら、どんな重度の障害児に出会っても、その子と私との共通部分の方が多くて共通じゃない所は本当にわずかでしかない。

という発想に立って日々の生活ができると思います。こんな感覚こそが、重い子どもたちとの真のつきあい方を生み出してくれるものと考えています。

この冊子は昨年全訪研2回大会での研究発表を新庄、谷口両先生にまとめてもらったものです。なお、谷口先生の研究発表は大会後の実践も加筆されています。

新庄久美子

〈自宅〉 宮津市滝馬209 教職員住宅11号

☎ 07722-5-1294

〈勤務先〉 京都府立与謝の海養護学校

谷口 順子

〈自宅〉 宇都宮市徳次郎町39-1

☎ 0268-21-4325

〈勤務先〉 栃木県立富屋養護学校

訪問教育研究第2集

1990年6月10日発行

編集 全国訪問教育研究会

事務局 〒191
東京都日野市新町1-5-22

御子柴昭治方

☎ 0425-81-0990